

明治三十八年九月十五日發行  
明治三十六年二月十三日第三種郵便物認可

# 地學雜誌

明治三十八年九月  
第十七年第二百號

## 目 要

- |                        |     |            |
|------------------------|-----|------------|
| ●新硫黃島視察談               | 論 說 | 理學士 佐藤傳藏   |
| ●元祿中松前藩の唐太に於ける版圖(完結)   |     | 吉田東伍       |
| ●唐太島と千島との石器時代遺跡に就て(完結) |     | 鳥居龍藏       |
| ●間宮林藏氏の樺太探検と近藤守重高橋景保   |     | 小川琢治       |
| ●兩氏の卓見                 |     | 小林房太郎      |
| ●隱岐國竹島に關する舊記(承前)       | 錄   | 田中阿歌麻呂     |
| ●南船北馬(第二十二稿)           |     | 石井八次郎      |
| ●人國記の一節                |     | 小林房太郎      |
| ●第二十八版附圖               |     | 間宮林藏自筆の樺太圖 |
| ●第二十九版                 | 報   | 高橋景保の樺太圖   |
- アツア十二件 ●ヨーロッパ二件 ●アフリカ、一件 ●アメリカ、大洋州及兩極其他八件



明治二十一年十二月十日内務省許可

論 說 (間宮林藏氏の樺太探検と近藤守重高橋景保兩氏の卓見)

六六〇 (660)

らん而して兩先生が互に氣脈を通ぜしや否やは之を斷するや容易の業に非るべきも之を改正するの餘考ありと聞けりなる北夷考證の一片により其親否の程度を知るを得べく決して禍福相共にするの程度に非りしならん吾人は是に至りて其學說上の奇遇を感ずると共に近藤先生が間宮先生の報告により翻然として自説を撤回するの快舉に出でしを嘆美せずんば非ず。

北夷考證は亦曰くカラフトとサハリヤンは自ら二島をなすと云ひ又同島なりとするものありて衆説紛々たりと聞けり余固より其説に論なし

當時同島に關する議論の轟々たりしを想像すべく此兩偉人によりて此難問は決定せらるゝに至りしを知るに足るべし然りと雖も一事の遺憾に堪へざるは近藤先生が後年筆を起して邊分要界圖考文化元年著を訂正するの舉に出でず世人をして先生が樺太に關する智識をして林子平と同一視せしむるに至らんことこれなり吾人は我地學上のため之を悲み我先生の爲め之を嘆ぜずんば非るなり

雜 録

隱岐國竹島に關する舊記 (承前)

田 中 阿 歌 麻 呂

さて夫より三年を過て元祿十一年(西曆一六八八年)の秋米子の市人村川市兵衛江戸に出て愁訴に及べ

り(竹島) 其の後は如何なりしやらん何事も聞き侍らず(弘接するに宜に此の村川大谷兩人が呈せしと  
 ば其書といへるものは此時の呈書かと思はる余も此の呈書然るに其後二十八年を過て享保九(一七二  
 を見まほしく累年探索すれどもいまだ得ざること遺憾なり) 然るに其後二十八年を過て享保九(一七二  
 甲辰の年江府より因州家へ 臺聞有て但し米子は荒尾但馬の食邑なれば同氏へ令して之を止  
 さしめられしとかや然るに其時彼家より此兩商の呈する所の書を謄寫して大夫池田豊後より官  
 へ呈せしとかや

第二 地理

さて其島伯州會見郡濱野日三柳村より隱岐の後島へ三十五六里あり此遠見の考を以て朝鮮の  
 山を見れば凡四十里と想はる(金森建策筆記並同人の考に此山といへるは朝鮮の蔚陵山なるか此筆記と  
 接するに其漁叟といふもの石洲瀨田の漁夫長兵衛といへるものか遊歴の時此近國にて好事の家にてなが  
 長兵衛の傳へしことを以てするすなり長兵衛後備前に至り小  
 原町といへるにて死す金森建策が筆記多くは是に據ならん)

其地東西凡三里半四里には満ざるよし南北凡六七里ありとかや聞けり周圍十六里といへり其  
 廻りに九ヶ所の岩岬あり又其餘少き岬々は擧て數へがたし又島の根に岩島暗礁多し暗礁無數奇  
 岩怪石筆狀しがたしとかや因て船をよするに到て其場所宜しからず只隱岐の國福浦(隱岐都府中  
 一宮の南なり)より船を出して戌亥の方に向て遣り(凡四十里といへり)

大坂浦といふに着けり(當島の南東隅にして二つの岬の間あり凡此岬と岬との間平地なる瀆一里半  
 しにて水勢急なり川上に瀑布有て年魚を産することかや又海岸岩石に地多く海風滿面にあり其餘東海夫  
 人等並に海草擧てしるしがたし以下其の品あることかや又海岸岩石に地多く海風滿面にあり其餘東海夫  
 並雜木にして陰森竹多くありて此瀆に船をよするに向ふ風を避て  
 蓋以て便なりといへり然れども皆無名の處なれば記すに據なし)

雜 錄 (隱岐國竹島に關する舊記)



邊りの土人、此話をする時は、少しの岩岬をまた廻り、此岬岩の一つの岩島、此岬と島との間三十間ばかりと、實に不思議の様、に説けり。少しの岩岬をまた廻り、此岬岩の一つの岩島、此岬と島との間三十間ばかりと、越て砂濱に出る。小流れあり、大岩壁に瀑布三つあり、何れも高五十間といへり。また井で岩岬三つあり、此處、何れも小を廻りて浦なり、小石濱、凡二十に出る。此邊り暗礁多し。濱形、卵辰に向ふなり。小流、島あり、高五十間、周、十五、六間といへり。其上にまた少し、隔て海中に島あり。此周二十丁上に樹木多きよし。周並で南の松、岩岬を廻りに出る。少しの濱、此邊り陸の方、平山にして樹木多く竹また多しと聞けり。また一つ岩岬を廻り、此處、辰に洞あり、此洞、奥行二と云ふ、一説二十丁といへり。此濱己の方に島あり、高二十間、周りに暗礁多し、向ふなり、洞あり、丁半ばかりと云ふ、向ふよし、川一つあるよし、前にまた島あり、其廻り凡一町半といへり。上に松の木あり、弘按するに高きよし、何れも周りが間少なるは如何なることやらん。其二十間五十間とまたするは、凡のつもりにしてよもさまであるまじきものをや、然れども余は聞しまいをしるし置けり。また一つ岩岬を廻りて、彼の大坂浦に來ると聞けり。我が日記也。總て此島中峻嶺多く、樹木繁茂又瀑布處々にあり、東に當る處には一つの奇泉あるよし、其水清く味甘美なり。一日に漸く一升許り湧出す。伯耆竹島圖說(此島に甘泉の瀧あり、また甘泉あることを沙汰す。實に是無比の奇島なり(未完))民談(然れども未だ其實を糺さざる故に爰に除く云云)

### 南船北馬 (第二十二稿)

理學士 石井 八萬次郎

### 重慶より石油地に往復す

前稿に申しました通りに重慶成都附近には處々に鹽井と石油井と火井即ち瓦斯の出る穴があり、ます、此石油と鹽水とは、各國でも相關鍵して居りますが、大抵石油が重要な目的物となりて、鹽水は副産物又は廢物となつて居る。然るに四川では、此鹽水が重要産物となつて、石油や瓦斯は副産物と

# 地學雜誌第十七年第二百一號目次

## 論

- 新硫黃島視察談……………理學士 佐藤傳藏(六五)
- 元祿中松前藩の唐太に於ける版圖(完結)……………吉田東伍(六八)
- 唐太島と千島との石器時代遺跡に就て(完結)……………

## 雜

- 隱岐國竹島に關する舊記(承前)……………田中阿歌麻呂(六〇)
- 南船北馬(第二十二稿)……………理學士 石井八万次郎(六三)

## 附

- 第二十八版 間宮林藏自筆の樺太圖

## 雜

- 樺太コルサコフの改稱
- 登別及熱海間歇泉の近狀
- 波島國駒ヶ嶽噴火
- 赤城火山大沼結氷期
- 畿内附近の地質構造線
- 畿内地方に於ける花崗岩の採掘

## 說

- 間宮林藏氏の樺太探檢と近藤守重高橋景保兩氏の卓見……………理學士 小川琢治(六四)
- 鳥居龍藏(六四)
- 小林房太郎(六五)

## 錄

- 人國記の一節……………小林房太郎(六七)

## 圖

- 第二十九版 高橋景保の樺太圖

## 報

- 村落及夏期移住に及びず日光の影響
- アイスランドの最高峯
- アフリカ諸大湖の探檢
- コロラドに於ける曹達水の湖沼
- イグアスー瀑
- ピスマルタ群島各地新探
- サモア諸島新火山大破裂
- 北極洋に於けるオルレアン公の巡航探檢隊
- エリゼルクリュー教授訃音
- 文部省檢定地理科豫備試驗問題(第十九回)
- 正誤

# 東京地學協會

(明治十二年四月創立)

總裁 閑院宮 載仁親王殿下

會長 子爵 榎本武揚

副會長 男爵 花房義質

副會長 子爵 岡護美

主幹 理事 伊木常誠 農學士 志賀重昂 理學士 佐藤傳藏

監事

荒井郁之助 農學士 山上萬次郎

名譽評議員

侯爵 鍋島直大 男爵 赤松則良

伯爵 桂太郎 子爵 曾我祐準

評議員

男爵 花房義質 子爵 榎本武揚

理學博士 橫山又次郎 理學博士 田中阿歌麻呂

農學博士 菊池大麓 理學博士 巨智部忠承

理學士 志賀重昂 理學士 佐藤傳藏

理學士 伊木常誠 理學士 和田維四郎

理學士 井上藤之助

編輯委員

田中阿歌麻呂

男爵 大島圭介

伯爵 井上馨

子爵 長岡健美

理學博士 坪井正五郎

理學士 小川琢治

理學士 藤水健五郎

理學士 金原信壽

理學士 佐藤傳藏